

## 動物と人間を繋ぐもの（1）

—カフカ、クッツェー、ホフマンスタール、キニャール—

### Ce qui nous pousse vers l'animal

—Kafka, Coetzee, Hofmannsthal, Quignard—

小川 美登里 (Midori OGAWA)

Dans le monde où nous vivons, tout paraît clair et net. Là, l'homme est l'homme et non animal ou nature. Mais, en même temps, l'homme peut être aussi animal ou nature, d'autant plus que toutes ces notions sont comparables et par là substituables, voire interchangeables. C'est par la manipulation linguistique que l'homme s'empare de son statut d'homme et, sans cette manipulation, l'humanité en tant que quintessence de l'humain risquerait de se réduire à rien. Notre article se penche sur cette question que nous posons comme la relation entre l'homme et l'animal, prise du point de vue de la langue. Cette question traverse la modernité pour devenir imminente dans nos jours. Dans cette première partie, nous posons des jalons en convoquant trois écrivains —Kafka, Coetzee, Quignard— tous placés sous le patronage de Hofmannsthal et son personnage Lord Chandos.

キーワード: 言語 (langue), 動物 (animal), エコクリティーク (écocritique), カフカ (Kafka), クッツェー (Coetzee), ホフマンスタール (Hofmannsthal), キニャール (Quignard)

### 1. 動物寓話からエコクリティークへ

フランツ・カフカの短編「ある学会報告」は、短編「ジャッカルとアラビア人」との抱き合わせで、「二つの動物物語」のタイトルの下、1917年4月に発表された<sup>1</sup>。日本人編者が両編を「寓話」というジャンルで括っていることからわかるように、これらは擬人化した動物を主人公として教訓や風刺を盛り込んだ、イソップやラ・フォンテーヌの流れに与するテキストとして受容されてきた。それにしてもカフカが動物を主人公として書き残した短編は意外にも多く（先の二篇以外にも、ネズミを主人公とした「歌姫ヨゼフィーネ、あるいは二十日鼠族」や、自分の巣穴でパニックに陥る謎の動物を描いた「巣穴」、ある朝、突然虫になった人間の物語『変身』など）、作家自身がそれらに寓話としての地位を与えたという明白な証拠がない以上、作品に込められた真意を知るのは容易ではない。たしかに、人間中心主義の観点からすれば、寓話（人間になったサルや、昆虫に変身した人間）や擬人化（人間のよう歌うネズミ）として読む方がなにか都合がよいかもかもしれない。だが、仮にカフカが動物主人公たちを「あるがままの存在」としてみなし、描いていたとしたらどうだろう。同じくカフカの短編のタイトルである「雑種」のような存在、つまり一般に動物と呼ばれる範疇からはみ出した存在が問題になっていたとしたら？これに

<sup>1</sup> フランツ・カフカ (2013) : 「ある学会報告」 (*Ein Bericht für eine Akademie*)、『カフカ寓話集』池内紀訳、岩波文庫。

関して、J. M. クッツエーは、2003年の小説『エリザベス・コストロ』の中で、カフカの「ある学会報告」での言語を獲得したサル物語と、カフカのテキストと同じく1917年に出版された、サルの動物実験に関するヴォルフガング・ケーラーの科学論文『サルのメンタリティ』との関連を指摘している<sup>2</sup>。作者のクッツエーは、主人公エリザベス・コストロの言葉を借りつつ、カフカがケーラーを読んだかどうかの真偽を保留しているが、こうした読解はある意味、示唆的である。なぜなら、それまで寓話や擬人化のパースペクティブで読まれてきた、動物を主人公とする文学作品を、完璧な虚構作品としてではなく、哲学や動物心理学、文化人類学、ひいては自然科学の視点から学際的にとらえ、研究対象とする Animal Studies の台頭と連動しているからだ。つまり、解釈の刷新と射程の拡張が問題となっているのであり、動物物語（寓話というジャンル）に新たな光を当て、そこに非人間的なものとの緊張関係をみようとするエコクリティック的な態度がここでは問題となっているのである<sup>3</sup>。

## 2. 赤っ面のペーター（レッド・ペーター）とは何者か（カフカからクッツエーへ）

カフカの「ある学会報告」は次のように始まる。

学会の諸先生方！

かたじけなくも、猿であったころの前身につき当学会で報告せよとの要請をいただきまして、いまここにまかり出た次第であります。

とはいえ残念ながら、あまりご期待に添えないであります。猿の生活と縁を切って五年ちかくなるのです。カレンダーでいえばわずか五年であります。この身で駆け抜けなくてはならなかった目まぐるしい変転の点から申しますと、無限に永い時間でした。[...] もし私が、かたくなに自分の生まれや育ちや青春の思い出にこだわっていたとしたら、猿から人間への転進など、とうてい不可能だったことでしょう<sup>4</sup>。

「ある学会の報告」は、人間の言語（おそらくはドイツ語）を習得した一匹のサルが、みずからの体験を学会員諸氏（科学者あるいは哲学者たち）に披露するという体裁を取っている。だが、これを「ヒトになったサル」のケースとみなすのは早計だ。たしかに、いまや人間社会に溶け込んで流暢に言葉を操り、立派な身なりをしてはいるものの、ズボンのお尻からは尻尾がはみ出し

<sup>2</sup> Coetzee, J.M.(2003) : *Elisabeth Costello*, Viking Penguin, p. 71. 小説では1912年から1920年までの間、サル、とくにチンパンジーの能力実験のための施設を収容したプロイセン科学アカデミーが、カナリア諸島のテネリフェ島に置かれていた事実に言及されている。

<sup>3</sup> エコクリティシズム (ecocriticism) は十九世紀末のネイチャー・ライティングに端を発し、二十世紀中盤の環境文学を経て発展した英米批評の一ジャンルである。2010年代以降フランスにも入ってきたが、気候変動問題をめぐる科学やジャーナリズムの言説を取り込んで進化するエコクリティシズム (ecocriticism) に対して、フランス系のエコクリティック (écocritique) は文学の本質である言語創造を通して、人間性の拡張を探るエコポエティック (écopoétique) の側面を強く持っている。エコクリティシズム (ecocriticism) とエコクリティック (écocritique) の関連については、たとえば次の文献を参照せよ。 *Contemporary French & Francophone Studies*, vol.25, Issue 1, January 2021, « Frontiers of Ecocriticism I », Routledge.

<sup>4</sup> カフカ「ある学会の報告」、p. 21-22.

ているし、なにしろちゃんとした名前すら与えられていないのだから（「赤っ面のペーター（レッド・ペーター）」という渾名を除いては）、少なくとも一般にいう人間とはみなされない。

では、赤っ面のペーター（レッド・ペーター）とは何者か？彼自身の説明によれば、半ば強制的、半ばみずからの意思で今、学会員たちの前にいる存在、つまり、「猿から人間への転進」について、自分の言葉以外では語りえない存在が彼なのだ。その物語はこうだ。アフリカの黄金海岸に生まれた彼は、ハーゲンバック商会の猛獣狩りで捕獲され（その際に頬に受けた銃痕から、赤っ面のペーター（レッド・ペーター）と呼ばれるようになる）、檻に入れられたまま船旅をし、本土到着後は、ハンブルグでの調教を皮切りに多くの教師の薫陶を受け、彼自身の「前代未聞の努力によって、[...] ヨーロッパの人間の平均的教養を身につけ」<sup>5</sup>、演芸館の一員となった——。赤っ面のペーター（レッド・ペーター）の半生を要約するとこのようになるが、少なくとも今、学会で報告する機会を与えられている点を考慮すると、「猿から人間への転進」の成功例とみなされているのだろう。もっとも、彼自身にとっては、そうした現状とて、永遠に続く転進の試練のひとつにすぎないのかもしれないが……。

しかし、その一方で、赤っ面のペーター（レッド・ペーター）の語りは、「猿から人間への転進」という一般化に強く抵抗する。なぜならその転進は、死を前にした極度のストレスと不安から抜け出そうとする本能によって、その都度「出口」を求めての闘いの結果にすぎないからだ（「自由などほしくありません。出口さえあればいいのです」<sup>6</sup>という言葉が印象的だ）。「猿であったころの前身」はもはや戻ることのできない遠い過去であるとはいえ、赤っ面のペーター（レッド・ペーター）が今現在、一体何者であるかについては、誰にも言えないだろう。

「ある学会の報告」では、作家カフカは語り手、つまり赤っ面のペーター（レッド・ペーター）の書記に徹している。対して、クッツエーは、みずからの分身ともいえる女流作家を登場させた小説の中で、主人公の息子が勤めるアップルトン・カレッジでの講演会をお膳立てし、動物（Animals）について語らせる。その際、先述したように、エリザベス・コストロは、カフカの「ある学会の報告」のテキストと自然科学（ケラーにおけるサルの実験）をクロスオーバーさせるのである<sup>7</sup>。そうとはいえ、文学作品に科学性という根拠を与える意図はそこにはなく、むしろ反対に、科学主義、より正確には進化論という名の一種の優生思想（そうでないのなら、なぜ常にサルからヒトへの進化が問題となり、その逆ではないのだろうか）と、それを支える西洋思想の蒙昧と残酷さを明るみに出すためである。一言で言うと、コストロは、赤っ面のペーター（レッド・ペーター）のうちに、一匹の孤独な動物の生死を賭けた駆け引きを見るのである。それを

<sup>5</sup> 同上、p. 37.

<sup>6</sup> 同上、p. 29.

<sup>7</sup> 『エリザベス・コストロ』は、それまでに発表されたテキストや講演を中心として、新たに小説として編まれたフィクション作品であり、作家クッツエーの分身のごとき女流作家エリザベス・コストロを主人公とする。主人公が行った講演とセミナーに当たる第三章と第四章は、哲学者 Peter Singer, Marjorie Garber, Wendy Doniger, Barbara Smuts らの応答を加える形で 1999 年、*The Lives of Animals* という別タイトルでも出版された。一方、女流作家が独自の視点から動物論を述べる第三章は「The Philosophers and the Animals」、第四章は「The Poets and the Animals」と題され、それぞれ哲学的、詩的観点からアプローチされている。また、小説の第七章と、後に触れる第八章は完全な書き下ろし部分と考えられる。

論証するためには、「猿から人間への転進」のプロセスを検証する必要があり、そのため赤っ面のペーター（レッド・ペーター）の現実世界での同志であり、ケーラー博士の実験対象でもあったサルのスルタンが引き合いに出されたのである。むろん、ケーラー博士の実験に参加したもっとも優秀なサルのスルタン——こちらは本物のサルである——ですら、カフカの主人公ほどの成功を収めることはなかったとはいえ、自由を奪われた状態で、人間的思考を学習する訓練を受けた点では共通点をもつ。作家コステロは、スルトンの感情を代弁することで、カフカのテキストでは語られない転進の内実を描き出そうと試みる。ケーラーらによって「実験」と称されるもの（たとえば、箱の上のバナナを取る、ワイヤーに吊るされたバナナを取るなどの一連の学習）は、被験者にとってはその都度、生死を賭けた闘いであり、実験の成功は生存を担保するものでこそあれ、知識の獲得とはなんら関係がない<sup>8</sup>。こうした実験の詳細をいわばスルトンの立場から語りながら、コステロは次のように続ける（カフカによる赤っ面のペーター（レッド・ペーター）の思考表現がそこに溶け込んでいるのに、読者は気づくだろう）。

At every turn Sultan is driven to think the less interesting thought. From the purity of speculation (Why do men behave like this?) he is relentlessly propelled towards lower, practical, instrumental reason (How does one use this to get that?) and thus towards acceptance of himself as primarily an organism with an appetite that needs to be satisfied. Although his entire history, from the time his mother was shot and he was captured, through his voyage in a cage to imprisonment on this island prison camp and the sadistic games that are played around food here, leads him to ask questions about the justice of the universe and the place of this penal colony in it, a carefully plotted psychological regimen conducts him *away* from ethics and metaphysics towards the humbler reaches of practical reason. And somehow, as he inches through this labyrinth of constraint, manipulation and duplicity, he must realize that on no account dare he give up, for on his shoulders rests the responsibility of representing apedom. The fate of his brothers and sisters may be determined by how well he performs<sup>9</sup>.

引用を見るかぎり、スルタン（そして彼に同化した赤っ面のペーター（レッド・ペーター））は輝かしい知の獲得へと邁進するどころか、逆に自由な想像力と思考力を禁じられ、「低級で、実用的、手段的な思考」にのみ反応する一個の「生き物」へと成り下がることを要求される。ケーラー的な成功とは、人間以下（*sous-homme*）の奴隷的存在を再生産することではないかと疑いたくなるのも当然だ。もっとも、こうした非人道的な仕打ちを切り抜けたスルタンたちの知性については、さまざまな障害や袋小路のたびに逃走線を引き、新たな展開や変容を創造する生成運動の一端を見ることができのかもしれない。その際には、ドゥルーズとガタリに倣って、（ヒトという）動物への生成変化を遂げたサルというマイナーな存在として、彼らを讃えるべきだろう<sup>10</sup>。

<sup>8</sup> «As long as Sultan continues to think wrong thoughts, he is starved», Coetzee, *op.cit.*, p. 73.

<sup>9</sup> *Ibid.*, pp. 73-74.

<sup>10</sup> Cf. ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ（2020）：『千のプラトー、資本主義と分裂症』（中）宇野

だが、より現実的にみれば、そうした進化や生成の裏にある痛みや犠牲を無視することはできないし、当事者にとっては成功よりも払った代償の方がむしろ大きいともいえるだろう。少なくともエリザベス・コストロはそう考えた。だからこそ彼女は、動物特有の沈黙から理性の饒舌への不条理な転落を余儀なくされた赤っ面のペーター（レッド・ペーター）やスルタンの隷属を、食肉加工工場へと輸送される動物たちの運命、ひいては人間同士の虐殺行為に結びつけるのである<sup>11</sup>。だが、大学での講演や学生セミナーでは受け入れられた彼女の主張も、知的サークルを離れて日常生活に触れたとたん、強固な拒絶に合う。動物の理性や権利というテーマが日々の殺生や食習慣に及ぶやいなや、忌避すべき話題になってしまうのだ。そもそも、仮に人権に呼応する権利や理性を動物に認めたとしても、対等な立場としてあるべき動物とのコミュニケーションが具体的にどのように行われるのかについては、大きな疑問が残る。他者との交流の可能性が示唆された瞬間に、人間の側からそれが排除されるのが現実なのだ。

### 3. エリザベス・コストロの試練（クッツエー）

たとえこうしたジレンマを完全には解消できずとも、問題の所在をより明確にするのは可能だろう。おそらくそうした意図で書かれた『エリザベス・コストロ』の第八章「門の前で At the Gate」は、一種の劇中夢のような雰囲気に覆われている。故郷のオーストラリアを離れて外遊中のコストロは、ヨーロッパの小都市（イタリア？あるいはオーストリア？）の空港に降り立つものの、入国ゲートで拒否される。ゲートの係員によると「所信声明文 statement of belief」を提出して審査に通らないかぎり、入国は許されないという。およそカフカの別の短編『掟の門』を下敷きに書かれた本章は、動物の問題を扱った第三および第四章と対をなしており、より厳密には、両章で表明された主人公の主張の批判的検討に呼応するといえる。本章でのコストロは、前章までとは明らかに異なる状況にいる。端的に言えば、第三章で彼女自身が引き合いに出したカフカの赤っ面のペーター（レッド・ペーター）と同様の境遇に置かれているのである。つまり、作者であるクッツエーは、ここにいたってみずからの登場人物を試練にかけ、作家の偽らざる動物への態度を引き出すために、それまで小説を支えていた「本当らしさ la vraisemblance」を一時的に放棄し、書き割りのような舞台装置の下で一種の法廷劇をしつらえることを選んだのである。とはいえ、コストロ自身は最初、事態をさほど深刻に捉えておらず、特定の「信念 belief」を持つことなく、あらゆる声に耳を傾けることこそ作家の「信条 belief」であると強弁する。だが、この第一の陳述はにべもなく却下されてしまう。入国の叶わぬまま、収容所かグーラグのような施設での無為の日々が続くうち、コストロは次第に追い詰められ、作家としての自分が試されていると実感する。もっとも、作家としてのコストロと人間としての彼女は同一人物である以上、赤っ面のペーター（レッド・ペーター）の場合と同じように、そこに賭けられたものが絵に描いた餅の

---

邦一ほか訳、河出文庫。

<sup>11</sup> Voir Coetzee, *op.cit.*, p. 71 : «If Red Peter took it upon himself to make the arduous descent from the silence of the beasts to the gabble of reason in the spirit of the scapegoat, the chosen one, then his amanuensis was a scapegoat from birth, with a presentiment, a *Vorgefühl*, for the massacre of the chosen people that was to take place so soon after his death.»

ように思弁的な「自由」ではなく、まさに生死を賭けた「出口」への突破であるという事実を彼女自身で認識する必要があったのではあるが。そこにいたるコステロの心の変化と、陳述内容を簡単に追ってみよう。

「所信声明文 *statement of belief*」の提出を最初に求められたとき、作家という自分の職業についての釈明を求められているとコステロは理解し（あたかも入国申請書の職業欄に職業を書き込むように）、なんの疑念も抱かず、審査官たちに向かって次のように訴える。

'I am a writer, and what I write is what I hear. I am a secretary of the invisible, one of many secretaries over the ages. That is my calling: dictation secretary. It is not for me to interrogate, to judge what is given me. I merely write down the words and then test them, test their soundness, to make sure I have heard right. [...] Before I can pass on I am required to state my beliefs', she reads. 'I reply: a good secretary should have no beliefs. It is inappropriate to the function. A secretary should merely be in readiness, waiting for the call'. [...] 'In my work, a belief is a resistance, an obstacle. I try to empty myself of resistances'<sup>12</sup>.

作家は「人知を超えたエネルギー *by powers beyond us*」<sup>13</sup>の「書記 *secretary*」なのだから、利他的な存在であるべきという論述は、結局のところ、作家自身は「信念 *belief*」を持つべきでない以上、「所信声明文 *statement of belief*」は無意味である（仮にどうしても必要というなら、不信こそ作家の信念であると書くしかない）という、一種の詭弁に陥る<sup>14</sup>。みずから行う論証がいささか文学的にすぎるとしても、「信念 *belief*」という概念からしてそもそも中身のない常套句にすぎないのではないか、そう考えているかのような言い分である。当然のことながら、信念をもたないという主張に対しては、信念なき人間などいないという反論がなされ、不信が信条であるという主張に対しては、シニシズムの烙印を押されることになる<sup>15</sup>。あらゆる声に耳を傾けるためには自己を空虚にしなければならないという主張に対しては<sup>16</sup>、さらに手厳しい反論がなされ、自分の作家としての資質が試されているとコステロは痛感する（「*For the first time this day she feels tested.*」<sup>17</sup>）。

入国ゲート通過のための単なる通過儀礼だったはずの手続きが、先の見えない異端審問の様子を呈するにつれて、自分に咎があるようにコステロには思えてくる。それは果たして作家であることの罪なのか、あるいは人間としての瑕疵なのか・・・ こうした心の迷いと比例するかのよう、状況の不条理さも身につまされてくる。これは畏なのではないか、エキゾチックな風景を背景としたパロディ劇の一人物に仕立て上げられたのではないか・・・ 理不尽な環境が張り巡

<sup>12</sup> *Ibid.*, p. 199-200.

<sup>13</sup> *Ibid.*

<sup>14</sup> Cf. *Ibid.*, p. 201 : « Unbelief is a belief. A disbeliever, if you will accept the distinction, though sometimes I feel disbelief becomes a credo too».

<sup>15</sup> Cf. *Ibid.*, p. 200 : « Without beliefs we are not human».

<sup>16</sup> Cf. *Ibid.*, p. 201, p. 204.

<sup>17</sup> *Ibid.*, p. 203.

らす包圍網は、コステロ自身によってついにカフカ的と形容されるほど強く意識されるようになる。たとえ彼女の陥ったのが「信念のビジネス the business of belief」<sup>18</sup>であれ、それは同時に「カフカのビジネス the Kafka business」<sup>19</sup>でもあった。この状況をどう打開すべきか。そのとき、収容所にいたひとりの女がコステロにこう言う。

‘Who knows what we truly believe’, says the woman. ‘It is here, buried in our heart.’ [...] Buried even from ourselves. It is not belief that the boards are after. The effect is enough, the effect of belief. Show them you feel and they will be satisfied.’<sup>20</sup>

ここで言う「枝 boards」とは審査官を指すが、「歌い鳥 the singing-birds」<sup>21</sup>になって審査官の聞きたい歌をさえずれば十分だと述べる女の意見は、陳情者であるコステロへの誘惑の言葉のように響く。「歌い鳥 the singing-birds」にくなる>ことはたしかに得策であり、あわよくば審査官からの称賛を勝ち取ることすらできるかもしれない。しかしながら、肉体的な疲労と焦燥を感じていたコステロにとっては勝利が目的なのではなく、あくまでもゲートを抜けるために自分はここにいるのだと思り返す<sup>22</sup>。

打算的な夢想から良識へとコステロを引き戻したのは、ほかならぬ彼女自身の肉体だった。それは自分が何者であるかについて、もう一度自問するきっかけを彼女に与える。

Not only is she *in* this body, this thing which not in the thousand years could she have dreamed up, so far beyond her powers would it be, she somehow *is* this body; and all around her on the square, on this beautiful morning, these people, somehow, *are* their bodies too<sup>23</sup>.

コステロという同一性、あるいは作家という自意識を納めた容器が身体なのではなくて、エリザベス・コステロそのものが身体であり、身体がエリザベス・コステロそのものであるという認識が芽生えたとき、彼女の自我や意識、理性、言語が生じるよりもずっと以前から「彼女はともかくこの身体」であり、おそらく他の人々や生物たちもそうなのだ気づく。

それはある意味、外部の他者の声として不安や死を聴き取るのではなく、おそらくは生まれてこの方ずっと、自分自身の身体を介してそれらを受け取り、それらに共振しているという事実気づくことでもある。身体という共通項をとおして、わたしたちは他者あるいは他種の存在者たちと漠然とながら繋がっており、その曖昧な繋がりを通して、生や死の感覚がもたらされる。コステロはホメロスの『オデュッセウス』に書かれた供犠の雄羊の場面を思い出す。血を流して死んでいく犠牲の雄羊は、彼女にとって単なる言葉でもなければ、単なるイメージでもない。その

<sup>18</sup> *Ibid.*, p. 207.

<sup>19</sup> *Ibid.*, p. 209.

<sup>20</sup> *Ibid.*, p. 214.

<sup>21</sup> *Ibid.*, p. 214.

<sup>22</sup> *Ibid.*, p. 219 : « She is not here to win an argument, she is here to win a pass, a passage ».

<sup>23</sup> *Ibid.*, p. 210.

場面で描かれる羊に「信」(belief あるいは faith)を置く<sup>24</sup>からこそ、羊の死の場面が彼女に生命の真実のひとつ、すなわち「生きるとは死ぬことができるということだ」という真実をもたらすのである<sup>25</sup>。こうした死の可能性(死の恐怖)への想念が、カフカの不条理から抜け出すための力を与えるだろう。「I must get out of here before I die!」<sup>26</sup>というコストロの心の叫びは、カフカの赤っ面のペーター(レッド・ペーター)の「腹で考える」態度を連想させる。

出口なし、さりながら出口を見つけなくてはならず、出口なしでは生きられない。[...]ならば、よろしい、猿であるのをやめようじゃないか。この上なく明晰で、見事な思考のプロセスではありませんか。お腹で考えだしたところなんです。猿はお腹で考えるのです<sup>27</sup>。

そして三度目の陳述の機会が訪れる(小説中では最後の陳述であるが、それがコストロにとつて最後の陳述なのかどうかは示されない)。彼女の予想どおり、それは「法の法廷 court of law」でも「論理の法廷 court of logic」でもなく、「逆説の法廷 court of paradoxe」の様相を呈することになる<sup>28</sup>。とはいえ、単に状況の不条理さを示すカフカ的な「逆説の法廷」にとどまらない、別の意味もそこには込められているように思われる。なぜならこの三度目(童話の世界の法則では、三度目はずねに最後のチャンスである)の陳述で、コストロは言葉を持たない/必要としない存在者への信を、言葉を媒介として、言葉が通じる(あるいは多少の皮肉を込めて言えば、言葉しか通じない)審査官に対して表明するからである。ここでの言葉を持たない/必要としない存在者とは、コストロが幼年期を過ごしたカナダの地方都市ビクトリアの Dulgannon 川で鳴くのをかつて聞いたことのある、何千匹ものカエルのことだ。最後の法廷で、コストロは幼年時代の大切な思い出——故郷の川で雨の中一晩じゅう鳴き続ける夥しい数のカエルの声が聞こえたかと思うと、鳴き声が途絶えて川全体は完全な沈黙に包まれるが、その後、まるで冥府から蘇ったかのように、ふたたびカエルの鳴き声が闇夜に響き渡る光景——を語る。

Yes, that she can believe in: the dissolution, the return to the elements; and the converse moment she can believe in too, when the first quiver of returning life runs through the body and the limbs contract, the hands flex. She can believe in that, if she concentrates closely enough, word by word<sup>29</sup>.

カエルたちはどこから来たのか、どこへ消えゆくのか・・・カエルの声をとおして少女時代のコストロは生命の循環を知る。生と死の織りなす光景の記憶が新たな生の予感を吹き込み、彼女の身体的全領域を震撼させ、表現行為へと向かわせる。こうした秘められた前言語的な交渉こそ、

<sup>24</sup> Cf. *Ibid.*, p. 211.

<sup>25</sup> *Ibid.* : « For that, finally, is all it means to be alive: to be able to die ».

<sup>26</sup> *Ibid.*, p. 215.

<sup>27</sup> カフカ「ある学会報告」、p. 27.

<sup>28</sup> Coetzee, *op.cit.*, p. 223.

<sup>29</sup> *Ibid.*, p. 220.

コステロが真に信じるべきものだといえるだろう。たとえそれを伝える手段が言語しかなく、言語がそれを寓意（アレゴリー）や比喻（メタファー）に変質してしまうようにみえたとしても、それはあくまでも言葉のもつ特質のせいであり、語られた光景の実在性そのものは否定されえない。語りによって言葉の彼岸へと追いやられたカエルたちの存在そのものを否定することはできないのだ。

In my account, for whose many failings I beg your pardon, the life cycle of the frog may sound allegorical, but to the frogs themselves it is no allegory, it is the thing itself, the only thing. What do I believe? I believe in those little frogs. [...] It is because of their indifference to me that I believe in them. And that is why, this afternoon, in this lamentably rushed and lamentably literary presentation for which I again apologize, but I thought I would offer myself to you without forethought, *toute nue* so to speak, and almost, as you can see for yourselves, without notes — that is why I speak to you of frogs. Of frogs and of my belief or beliefs and of the relation between the former and the latter. Because they exist<sup>30</sup>.

「虚飾のない *toute nue*」態度でコステロの訴える「信 belief」をめぐるこの究極の弁明は、実際には、カエルのような非人間的存在との関係性においてしか成立しない。その事実は、引用の少し先でコステロが付け加える次の文章からも明らかだ。「I believe in what does not bother to believe in me」<sup>31</sup>。詩人あるいは作家にとって、言葉をもたない存在者と人間を結びつけるためにこそ、言葉は必要とされる。コステロのたどり着いた結論は、自己弁護のための「所信声明文 statement of belief」の枠を超えて、ついには自己の概念すら消失した視点に立脚する。「*I am an other*」<sup>32</sup>というコステロの証言は、アルチュール・ランボーの有名な「見者の手紙」における「*Je est un autre*」を連想させるが、カエルのエピソードが着想源とするのはむしろ、フーゴー・ホフマンスタールの短編『チャンドス卿の手紙』<sup>33</sup>であり、とりわけ主人公チャンドス卿が言及する古代ローマの雄弁家クラッススの逸話である。

#### 4. レディ・エリザベス・チャンドスからホフマンスタールへの手紙（クッツエーからホフマンスタールへ）

クッツエーの『エリザベス・コステロ』の第八章「門の前で At the Gate」と、ホフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』との関連は、とりわけ小説末尾に添えられた「あとがき Postscript」が *Letter of Elisabeth, Lady Chandos* と題されたテキストによって構成されている点から類推される<sup>34</sup>。赤っ面のペーター（レッド・ペーター）の登場するカフカの「ある学会の報告」が、いわば

<sup>30</sup> *Ibid.*, pp. 217-218.

<sup>31</sup> *Ibid.*, p. 218.

<sup>32</sup> Coetzee, *op.cit.*, p. 221.

<sup>33</sup> フーゴー・フォン・ホフマンスタール（1991）：「チャンドス卿の手紙」 (*Ein Brief*)、『チャンドス卿の手紙、他十篇』 檜山哲彦訳、岩波文庫。

<sup>34</sup> あとがき *Letter of Elisabeth, Lady Chandos* の初出は2002年、雑誌 *Intermezzo* 誌においてである。

作品内に織り込まれた明示的な間テキストであるなら、『チャンドス卿の手紙』は物語世界外の視点から関係を暗示する。また、この「あとがき」の形式が本歌であるホフマンスタールの文学的模倣である点にも留意したい。一人称の書簡形式をもち、十七世紀に活躍した実在のイギリス人哲学者フランシス・ベイコンに宛てた架空の友チャンドス卿からの手紙を創造したホフマンスタールに倣って、クッツエーはレディ・エリザベス・チャンドス（チャンドス卿の妻）なる人物を造形し、表向きには同じくベイコン宛ての手紙という体裁を取りながらも、その実、ホフマンスタールへの応答を試みているのである。

レディ・エリザベス・チャンドスの手紙は、夫であるチャンドス卿が友人フランシス・ベイコンに送った手紙のおよそ三週間後に、同じ人物に向けて書かれたという体裁を取っている。ホフマンスタールの『チャンドス卿の手紙』に妻への言及が一切ないことから、クッツエーのテキストはどちらかといえば先人のテキストへの注釈、あるいはそれへの目配せを含む自己言及（とりわけ第八章への自己言及）という性格を帯びている。この二重の機能は、とりわけ第三者である読者にとっては、ホフマンスタールの描くチャンドス卿の立場と、エリザベス・コストロの立ち位置の違いを浮き彫りにする効果を持つ。レディ・エリザベス・チャンドスは手紙の中で、夫の陥った「緘黙（かんもく）状態 aphasia」を「苦悩の時代 time of affliction」<sup>35</sup>と呼び、それ以前のいわば恩寵の時代と、その後の来るべき「啓示 revelation」<sup>36</sup>の時代の空位期として位置づける。言葉への信頼を失って精神の膠着に陥ったチャンドスは、みずからの手紙の中で、緘黙以前の状態を次のように綴っていた。

ようするに、当時は、ある種の陶酔の持続のうちにあって、存在全体が一箇の大いなる統一体と見えていたのです。精神と肉体の世界が対立するとは思えず、洗練されたものと猥めいたもの、芸術と非芸術、ひとりと集団などが対立するとは思えませんでした。すべてのもののうちにわたしは自然を感じていたのです。極度に洗練されたスペインの儀式におけると同様、狂気の錯乱のうちにも、またきわめてすばらしい比喻におけると少しも劣らず、若い農夫の無骨さのうちにも。そして、あらゆる自然のうち自分自身を感じていました。[...] 一は他と同様であり、夢のような超自然的な性格においても、身体におよぼす力の点でも、あれとこれに優劣はつけられませんでした。生の全幅にわたって、右も左もそうした状態が続き、どこにあってもわたしは生のまっただなかにおり、幻めいたものはまったく認められなかったのです。あるいは、すべてのものは比喻であり、いかなる被造物も他の被造物を理解する鍵であると予感していたのであり、おそらく、自分はずぎつぎに被造物の神髄をとらえ、それをもちいて解き明かしかうかぎり多くの神髄を解き明かす能力をもった人間だ、とでも感じていたのでしょう<sup>37</sup>。

言葉とそれが名指す事物が一致し、言葉を介して人と事物が繋がり、さらには創造物全体が宇宙

<sup>35</sup> Coetzee, *op.cit.*, p. 227.

<sup>36</sup> *Ibid.*, p. 229.

<sup>37</sup> ホフマンスタール「チャンドス卿の手紙」、pp.107-108.

的な広がりの中でひとつになるという体験を、チャンドスはかつて日常的に経験していた。ところが、信仰的な危機を経るわけでもなく、ある日突然、世界が彼から遠ざかってしまう。それに呼応するように、「なにかを別のものと関連づけて考えたり話したりする能力がまったくなくなって」<sup>38</sup>しまう。そのとき、チャンドスは言葉が無味乾燥な砂にすぎず、実体のない無意味な存在でしかないことを悟る。レディ・チャンドスの言葉を借りるなら、言葉が聖なるエネルギーを帯びた仲介者であるどころか、ある対象を語るためにはつねに別の事物を経なくてはならないという、言語の「伝染作用 contagion」にチャンドスが気づいたということであろう<sup>39</sup>。言語のこうした伝染作用と並んで、事物を任意かつ暴力的に結びつけながら、語る主体を彼自身からも遠ざける言語の比喩機能も露わになる<sup>40</sup>。その結果、言葉と事物の間の籬（たが）が外れた、ぐらついた言葉の大地をさまよう孤独な旅人<sup>41</sup>へとチャンドスを変えてしまうのである。語る行為がその実、媒介項を永遠に増殖させることでしか対象に接近できず、当の対象から際限なく遠ざかっていくというその本性をあらわすその一方で、言葉から乖離した事物はいまやそれ自身の光で輝き、言語の及ばぬ特別な意味を持ち始める。事物がみずから語りかけるその意味は、「いかなる言葉もそれを言い表すには貧しすぎる」<sup>42</sup>ほどに崇高な徴を帯びてみえる。調和を欠いた関係を世界と保ち続けることのできなくなったチャンドスは、事物たちが発する崇高な意味の前に首を垂れ、沈黙の中に蟄居することを選んだ。以上が、『チャンドス卿の手紙』で描かれた主人公の姿である。強靱な精神の持ち主以外、およそ足元の大地が崩れ去るような場所で生きることができない、とレディ・チャンドスは夫を擁護する<sup>43</sup>。だが、その一方で、彼女の手紙——夫の心情を理解しつつも、言葉の伝染作用と事物が放つ解説不可能な意味に抗いながら、なおも言葉を紡ぎ続ける彼女自身の手紙——は、チャンドス卿とは異なる態度をパフォーマンスなやり方で表明しているように思われる。言語への不信に対して、レディ・チャンドスは沈黙ではなく言葉を対置する。こうしたレディ・エリザベス・チャンドスの態度は、クッツエーのもうひとりの主人公であるエリザベス・コストロにも受け継がれている（エリザベス・コストロは、果たしてレディ・エリザベス・チャンドスの末裔なのだろうか。その点については小説で触れられていない）。作家としての「信 belief」を問われた審判で、コストロは最後にこう付け加える。

‘But as a writer,’ she persists—, ‘what chance do I stand as a writer, with the special problems of a writer, the special fidelities?’

*Fidelities*. Now that she has brought it out, she recognizes it as the word on which all hinges<sup>44</sup>.

<sup>38</sup> 同上、p. 108.

<sup>39</sup> Cf. Coetzee, *op.cit.*, p. 228 : « It is like a contagion, saying one thing always for another (like a contagion, I say: barely did I hold myself back from saying, a plague of rats, for rats are everywhere about us these days) ».

<sup>40</sup> 「比喩」の語源であるギリシア語の *metaphora* は「移動」の意味。

<sup>41</sup> Coetzee, *op.cit.*, p. 228

<sup>42</sup> ホフマンスタール「チャンドス卿の手紙」、pp.112-113. Cf. Coetzee, *op.cit.*, p. 228 : « *Always it is not what I say but something else* ».

<sup>43</sup> Cf. Coetzee, *op.cit.*, p. 228 : « *We are not meant to live thus. Only for extreme souls may it have been intended to live thus, where words give way beneath your feet like rotting boards* ».

<sup>44</sup> *Ibid.*, p. 224.

コストロは、チャンドス卿のように「存在全体が一箇の大いなる統一体」とはとらえない。むしろ彼の陥った緘黙状態、すなわち人間と非人間的存在の繋がりが断ち切れたその場所から、ひとつひとつ関係性を修復する必要があると考えている。それは自分自身、あるいは特定のなにかへの「信 belief」ではなく、物言わぬ存在それぞれに対してふたたび結ばれるべき忠節であり義務である。より正確にいうなら、この世に存在するかぎりにおいて、非言語的な存在者たちとすでに結ばれている約束を遵守するという意味での fidelities が問題となっているのである。諸存在への忠節こそ、世界と人間を繋ぐ新たな蝶番なのである。

チャンドス卿の態度を責めることは私たちにはできない。なぜなら、彼こそ言語の機能とその限界を見事に言い得た最初のひとりなのだから。言語のほころびがもたらした精神の危機は、神なき世界、すなわちあらかじめ確定された境界や限界が消失したあとの世界と結ばれるべき、新たな関係性を暗示している。その意味において、既存の範疇を超え出る雑種となった赤っ面のペーター（レッド・ペーター）を生み出したカフカと、チャンドス卿を生んだホフマンスタールが同時代人であるという歴史的事実は興味深い。しかし、ホフマンスタールやカフカ後の時代を生きる私たちにとっては、彼らの示す危機を正しく理解し、さらにそれを乗り越える必要があるだろう。苦しみの中でエリザベス・コストロが自分にとっての「信 belief」を模索したように。

## 5. 雑種であること（ホフマンスタールからキニャールへ）

ホフマンスタールが『チャンドス卿の手紙』をとおして示した「失語症 aphasia」というテーマは、人間と世界との断絶面そのものを表しているという点において、非常に現代的（moderne）な問題を内包している。また、ともに言語機能の両義性（人間と世界を結ぶと同時に切り離す手段）をグロテスクなまでに前景化するという点では、カフカの赤っ面のペーター（レッド・ペーター）とチャンドス卿は相似的な関係にある。それらは言語がそれまで担保していた知の体系のほころびを示し、言語の外部を暗示するが、その外部とは、もはや外縁が見通せないほどの無限世界なのである。

この無限領域を前に後ずさりしたのがチャンドス卿であるなら、眩暈を感じながらも言葉を紡ぐべきだと主張したのがエリザベス・コストロである。しかし、見方によっては、両者ともに言語と人間存在をあまりにも同一視しているようにみえはしないだろうか。ここで今一度、カフカの赤っ面のペーター（レッド・ペーター）を想起しよう。ヒト語を習得した赤っ面のペーター（レッド・ペーター）は、二度と元のサルに戻れない「雑種 hybrid」になったと、エリザベス・コストロは主張する<sup>45</sup>。だが、人間にとっても言語は生得的な要素ではないのだから、その場合には、人間も同じく「雑種 hybrid」とみなすべきなのではなかろうか。いや、重要なのはむしろ、今ある言語の限界を拡張すべく、言語の機能を脱臼させ、新しい言語の創造へと向かう試みなのではないか。ドゥルーズとガタリはそれを動物への生成変化と呼んでいる<sup>46</sup>。むしろ、生物学的な先

<sup>45</sup> Cf. Coetzee, *op.cit.*, p. 75.

<sup>46</sup> Cf. ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトー、資本主義と分裂症』（中）、第十章、「一

祖返りという意味ではない。人間という確定された境界の外へと超え出ようとする欲求による一種のブレイクスルーが問題となっているのである。

しかし、どうやってそれが可能なのか。チャンドスやコストロの例からもわかるように、言語を得た人間にとっては、言葉という媒介をとおしてしか他者と繋がることできない。目に見えぬ存在者たちすべての声を聴き取ることが作家としての自分の責務である、そうコストロは訴えた。だが、彼女の真意は審査官には伝わらない。果たして彼女の言葉は、人間に対して向けられるべきものではなかったのではないか。チャンドス卿は言う。「まずはじめは、高尚であれ一般的であれ、ある話題をじっくり話すことが、そしてそのさい、だれもがいつもためらうことなくすらすらと口にする言葉を使うことが、しだいにできなくなりました。「精神」「魂」あるいは「肉体」といった言葉を口にするだけで、なんとも言い表しようもなく不快になるのです」<sup>47</sup>。そして言葉が「腐れ茸のように口のなかで崩れ」、概念が「とつぜん曖昧な色合いになり、輪郭をなくして入り混じって」<sup>48</sup>しまったと告白する。だが、チャンドス卿の陥った言語への不信と嫌悪は、実際には話し言葉（パロール）だけに関わるのではないだろうか。

フランスの現代作家パスカル・キニャールは、ホフマンスタールの提出した言語をめぐるアポリアをより詳細に吟味している。結論からいえば、キニャールもまたクッツエーと同じく、言語を放棄して緘黙状態に逃れようとするチャンドス卿の態度を批判しているが、一六〇三年九月十一日の日付をもち、チャンドス卿を擁護する姿勢で書かれた「レディ・エリザベス・チャンドス卿の手紙」とは対照的に、キニャールのテキストの方は、そのさらに二年後の一六〇五年四月二十三日の日付を付し、フランシス・ベイコンからチャンドス卿への返信という形を取っている<sup>49</sup>。哲学者からの応答らしく文章は論理的に構築され、チャンドス卿へのより直截で容赦なき反論となっている点が特徴的である。要するに、フランシス・ベイコンの名を借りて、キニャールはチャンドス卿の「失語症 aphasia」を批判すると同時に、言語を学びそれを受肉した人間にとって、言葉を放棄することなどはや不可能であり、「失語症 aphasia」は幻想にすぎないと論破するのである。しかし、その一方で、「失語症 aphasia」を嘆く手紙の内容とは裏腹に、チャンドス卿がそこで行う表現行為については、新たな言語創造の萌芽を感じさせるものとして評価する。チャンドス卿の「失語症 aphasia」を近代の一徴候ととらえ、言語と人間の関係性を明らかにしようとするキニャールの論証は、以下の段階を踏んで進められる。

・ 言語との訣別というチャンドス卿の考えは、不可能どころか「不遜 ingrât」ですらある。なぜなら、あれほど苦勞して習得し、すでに自分自身の一部となった言語をそう簡単に放棄することなどできないのだから。母の口を通じて与えられ、母の面影が刻印された話し言葉（パロール）——たしかに日本語では「母語」とも言う——は、いまや起源や故郷を想起させるあらゆるイメージと分ち難く結びついており、みずから望んで言語を受け入れた以上、そう簡単に言語から自

---

七三〇年——強度になること、動物になること、知覚しえぬものになること...——」を参照せよ。

<sup>47</sup> ホフマンスタール「チャンドス卿の手紙」、p. 109.

<sup>48</sup> 同上。

<sup>49</sup> Pascal Quignard (2020) : *La Réponse à Lord Chandos*, Galilée.

由にはなれるはずもない<sup>50</sup>。

- チャンドスのいう「言い得ぬもの l'inexplicable」<sup>51</sup>とは、言語の外部に存在する何物かではありえず、言語の作り出した対比の効果にすぎない。そもそも言語の源流にあるのは沈黙ではないのだから。「L'inexprimable n'est rien de réel. L'inexprimable est un *contraste du langage* qui vient à la suite de son apprentissage décidé, servile, laborieux. Mais l'amont du langage n'est pas le silence. Écoutez les oiseaux dans l'aube. Écoutez les enfants avant qu'ils apprennent à parler !」<sup>52</sup> そうであるなら、チャンドスの見出した沈黙の正体は一体、何なのだろうか。彼の言う「沈黙」は、言語の外部（世界）でもなければ、言語以前に人が経験した状態でもなく、単に言語の内部に位置するパロールの対蹠点でしかない。「Le mutisme n'est pas l'aphonie utérine ; le mutisme n'est pas l'enfance atmosphérique ; ce n'est qu'une langue rouillée ou sans service」<sup>53</sup>. つまり修辞としての沈黙であり、言語と同じように人工的に構築されたものなのだ。言語が信用できなくなったときに人がすぐさま逃げ込むことのできるこの沈黙は、安易な逃げ場所、言葉に寄り添う言語の影にすぎない<sup>54</sup>。

- 原初の沈黙が幻想である以上、言葉を放棄できると信じること、すなわち「言語習得以前の状態」(*Infans*) への回帰が可能であると信じること自体、「子供じみて」(*enfantin*) いる。そもそも可能か否かという選択肢などない。なぜなら、言語を習得した時点から、その選択肢はすでに消失しているのだから<sup>55</sup>。それが言葉を話す人間にとっての真実である。つまり、言語が生得的でないヒト種はそもそも、チャンドス卿や赤っ面のペーター（レッド・ペーター）と同じように、「現実」（言葉の中で生きること）と「欲望」（言葉の外への跳躍、あるいは回帰を夢想すること）の間で引き裂かれ続けるしかない。問題は「沈黙」と「言語」の対立ではなく、「現実」と「欲望」の間のそれにある、とキニャールは主張する。

Le choix de l'enfant à la fin de l'enfance est à la vérité un conflit qui n'est pas celui qui s'ouvre entre le silence et la langue, mais celui qui éclate entre le réel et le désir. Soit plier devant le réel, renoncer à satisfaire ses désirs, ses besoins, [...] avoir peur de cette excitation sempiternelle au fond de soi. Soit nier le réel, poursuivre ses dessins imaginairement sans la moindre terreur [...] . L'enfant pour commencer ne choisit pas, il se *déchire*, et il n'y a pas moyen qu'il en soit autrement, et c'est pourquoi il ne faut pas choisir.

Lord, il ne faut *jamais* choisir.

<sup>50</sup> *Ibid.*, pp. 27-28.

<sup>51</sup> Cf. フーゴー・ホフマンスタール「チャンドス卿の手紙」、pp.112-113：「たとえば、一箇の如露、畑に置きっぱなしの馬鍬、日なたに寝そべる犬、みずぼらしい墓地、不具者、小さな農家、こうしたものすべてがわたしの靈感の器となりうるのです。これらのいずれも、またこれらに似た多くのものはすべて、ふだんはあたりまえのものとして眼をとめることなく通りすぎてしまうのですが、ある瞬間とつぜん——この瞬間を意志で呼び寄せることはとうていわたしにはできません——心を動かす崇高なしるしを帯び、いかなる言葉もそれを言い表すには貧しすぎると見えてくるのです。」

<sup>52</sup> Pascal Quignard, *op.cit.*, p. 29.

<sup>53</sup> *Ibid.*, p. 41.

<sup>54</sup> *Ibid.*, p. 32 : « Le silence, placé alors en position seconde, n'est qu'une *fuite* impossible hors de la méditation qu'il impose. » ; « Ce n'est que l'ombre du langage, au pied du langage, contiguë au langage ».

<sup>55</sup> Cf. *Ibid.*, p. 48.

Vous n'êtes ni silence ni langue.

Il faut toujours vouloir *tout* et rester à l'état déchiré<sup>56</sup>.

ここでキニャールがエリザベス・コステロと同じ結論に至っている点は興味深い。また、先の引用で、コステロが陪審員に向かって幼年期の記憶を語った理由にも納得がいく。人間社会の基底をなす言語体系に完全に統合される以前の、ヒトがいまだ身体感覚によって他種の存在者たちと繋がっていた時間、キニャールのいう「引き裂かれた」時間へと戻らないかぎり、作家として「すべての存在者の声」を掬い取ることはできないからだ。「*fidelities*」を論じるコステロは、倫理的観点から言語機能を捉えている。言葉の優位性がゆえにではなく、逆に言葉を得たことによって人が失ったものへの郷愁を、言葉を持たない他者への「信 *belief / faith*」として復元するためにも、言葉をもたない存在者に対して言語を開くべきだという強い信念がそこにはある。一方のキニャールは、言葉をもたない存在者に言語を開く、すなわち「すべてを言う *tout dire*」ための実践的な方法を説く。そうした実践を通じてしか、偽の沈黙との対比効果でグロテスクなまでにその存在感を増した事物（自然）との歪んだ関係を修正することができないからである。つまり、チャンドス卿の陥った「失語症 *aphasie*」から治癒するためには、「すべてを言う *tout dire*」言語の潜在性に賭けるしかない。

Et s'il s'agissait vraiment de restaurer des expériences qui se sont éprouvées bien avant l'apprentissage de la langue parlée, c'est à la puissance du *tout dire* qu'il faudrait faire appel plutôt qu'à l'impuissance où un pseudo « *silence* » s'enferme noblement peut-être, mais comme un comédien, comme un hypocrite, comme un beau parleur, comme un ascète impossible<sup>57</sup>.

コステロの例に倣えば、生命の循環を全身で謳いあげるカエルたちと少なくとも同じ程度に、人は「すべてを言う *tout dire*」言葉の力に信を置くべきということだろう。それはある意味、言語を徹底的に受肉化して言語の身体を作り上げようとするものであり、つまるところ、言語がもつとも空疎に思われた瞬間にこそ、言語にしがみつくといい態度を死守するということでもある。チャンドス卿は、言葉が「腐れ茸のように口のなかで崩れ」、概念が「とつぜん曖昧な色合いになり、輪郭をなくして入り混じってしまう」経験を嘆いていた。しかし、実際には、レディ・チャンドスを通してクッツエーが書いたように、言葉の媒介なしでの現実世界との接触は、もはや人間には耐え難いものでしかない。言葉と事物の間の籬（たが）の外れたぐらつく大地を歩くことのできる旅人は稀にしかいないのだ。だが、現実とは無縁かつ空疎な言葉が事物と同一ではないという事実、そもそもチャンドス卿がある日突然気づいたとすれば、それは言葉と事物を結びつけていた言語の修辞機能が正常に作用しなくなったからにすぎないのではないか、そうキニャールは類推する。言葉を話す人間と現実の間の緩衝材（あるいは遮断幕）の役割を果たしていた

<sup>56</sup> *Ibid.*, p. 48.

<sup>57</sup> *Ibid.*, p. 32.

言語の修辞機能が欠損した途端、生身の現実が迫ってくる。その現実感に圧倒され、言語が不毛で不能に思えてくる。そして、それまで自明だった現実が崩れ去るだけでなく、自分が何者なのかについてすらわからなくなる。世界への信頼が崩れ去り、生きるために必要なわずかのやる気も高揚感も削がれ、ついには精神だけでなく肉体も萎えてしまう。庭に打ち捨てられた如露以上に無意味な肉の塊となった身体の内部では、早熟な死が訪れる<sup>58</sup>。チャンドス卿のこうした体験——それはおそらく作者ホフマンスタール自身の体験でもあるだろう——は、言葉への不信というよりもむしろ鬱症に近い。「失語症 aphasie」とともに、身体もまた極限状態に陥るからだ。・だが、身体が言語から洗い清められてふたたび空疎な器になったとき、精神がリセットされ、言語以前に遡る幻想や外傷が一度、消失する（「L'âme doit être mis au propre par la vieille détesse vitale natale.」<sup>59</sup>）。そのときチャンスが訪れるとキニャールは書いている。なぜなら言葉を習得する遙か以前に私たちの体験した飢えや欲求の感覚がそのとき呼び覚まされ、ひとつの叫びとなって身体の奥から搾り出されるからだ。その叫びこそ、あらゆる生物に共通の真実の声であり、それを糧にして人間言語が鍛錬しなおされるべき対象である。こうして「断食状態 une sorte de jeûne<sup>60</sup>」を経た後の再生は、新たな言語を切り拓くチャンスとなるが、重要なのは、その新しい言語が話し言葉（パロール）ではなく、書き言葉（エクリチュール）であるという点、つまり、チャンドス卿の嘆きのように「腐れ茸のように口のなかで崩れ」去る脆い砂のような言葉ではなく、声を犠牲にして生み出される沈黙の言葉としての言語、文字を刻印しながら頁という空間に新たに世界を創り上げようと試みる書き言葉（エクリチュール）である点だ。偽の沈黙の「子供じみた」（enfantin）「失語症 aphasie」とは異なり、書き言葉（エクリチュール）の沈黙は、言葉によって磨き上げられた力強い沈黙、キニャールの言葉で言う「まったく別の沈黙」を積極的に作り出す。

Pourquoi en venir si vite à l'hypothèse du silence ineffable ou sublime alors qu'un tout autre silence, un silence second, un silence augmenté du langage mis au silence, le *silence de l'écrit* vient rejoindre le silence de l'enfance et même recouvre en partie l'absence de source sonore qui précédait l'enfance ? Plus encore : écrire *précipite l'arrêt de la voix* qui viendra si sûrement dans la mort<sup>61</sup>.

書き言葉（エクリチュール）においては、話し言葉（パロール）の言語主体（二人称の「あなた」との対立関係によって担保される一人称の「私」というステータス）は解体され、それとともに言語は単なる伝達手段であることをやめる。そして、事物を名指し提示するための純粋な表現手

<sup>58</sup> *Ibid.*, p. 35-36 : « Une confiance s'est défaite. L'élan, le simple petit *allant* nécessaire à la vie, tous les petits muscles réflexes se sont dérobés tout à coup, à l'intérieur des membres, des muscles, des bras, des pieds, des doigts. [...] On pleure comme un homme qui meurt. [...] La crise d'angoisse est une effervescence si violente qu'elle ne permet plus aux sens de percevoir nettement ce qui d'ordinaire tombe sous leur emprise et qu'elle inverse et renverse tout avant de s'effondrer dans l'extrême impuissance et la mort anticipée et comme prématurée. »

<sup>59</sup> *Ibid.*, p. 37.

<sup>60</sup> *Ibid.*

<sup>61</sup> *Ibid.*, pp. 37-38.

段、現実世界を客体化しながら「すべてを言い *tout dire*」尽くそうとして、ついには死をも乗り超える手段となる。書き言葉（エクリチュール）は書き手の死後も沈黙の中で生き続ける。書き手の肉声が消え去ったあと、書き言葉の世界で生き延びたチャンドス卿の手紙がその動かぬ証拠である。鬱症に沈んだチャンドスの身体を糧として生み出されたこうした言葉の結晶こそ、現実と言語に引き裂かれた身体から生み出された、他性へと向かう身体の新たな姿であるといえるだろう。

## 6. おわりに

現実と言語の乖離の発見は、作者ホフマンスタールによって悲劇的な演出を施され、チャンドス卿という憂鬱な詩人のイメージを介して、*Modernité* を象徴する問いとして文学作品へと見事に昇華された。この作品が露わにした深淵は、人間中心主義的な眼差しを「人間ではないもの」へと向けさせる。だが、人間と「人間ではないもの」はまったく切り離された二つの種であると断言できるのだろうか。動物を主人公とするカフカの一連の作品は、そうした問いを投げかける。それはさらに、人間は動物ではないのか、人間は何者かといった問いに変奏される。

しかし、こんなふうにしたからといって、問題はまったく解決しないであろう。なぜなら、私たちは普段、言語によって分節化された世界に生き、それを現実世界とみなしているからである。そこでは生と死、人間と動物などすべてが固有の境界を持ち、それぞれに把握可能であるかのように見える。人類を救うために人類以外の存在に目を向けることが急務であると訴える昨今の環境主義者たちですら、人間、自然、動物、地球といった概念を自明のものとして扱っている。その一方で、こうした概念を量産した近代において、すでにそれらに疑念の目を向ける動きがあった事実は注目に値する。他性、言語、身体といった問題をめぐるこうした思索の流れは、前近代的な人間中心主義にも、他生物との共生や人間の機械化といった安易なポストモダン思考にも流れることなく、人間と動物をめぐる曖昧で不安を起こさせる交差性について考え続けようとする。二十世紀以降、カフカやホフマンスタールによる問題提起は、身体を媒介として言葉を動物のためのものにとらえるクッツエーの思考や、言葉を人間の一部として受け入れたうえで他性への接近を試みるキニャールらの思考を通して展開される。人間と動物の関係性を言語という観点から考察した本論は、近代から現代にいたる先鋭的な思想の痕跡をたどりつつ、次稿においてもキニャール、ドゥルーズとガタリ、バイイやドゥメを参照しながら考察を続けていく。

## 参考文献

フランツ・カフカ (2013) : 「ある学会報告」 (*Ein Bericht für eine Akademie*)、『カフカ寓話集』池内紀訳、岩波文庫, pp. 21-40.

ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ (2020) : 『千のプラトー、資本主義と分裂症』(中) 宇野邦一ほか訳、河出文庫。

フーゴー・フォン・ホフマンスタール (1991) : 「チャンドス卿の手紙」 (*Ein Brief*)、『チャンドス卿の手紙、他十篇』檜山哲彦訳、岩波文庫, pp. 101-122.

Coetzee, J.M.(2003) : *Elisabeth Costello*, Viking Penguin.

Quignard, P. (2020) : *La Réponse à Lord Chandos*, Galilée.

(おがわ みどり / 人文社会系)